

# 釣りバカ日誌18 ハマちゃんスーさん瀬戸の約束

2007(平成19)年9月16日鑑賞〈梅田ピカデリー〉

★★★



監督・脚本=朝原雄三/脚本=山田洋次/出演=西田敏行/三國連太郎/浅田美代子/持丸加賀/檀れい/星由里子/高嶋政伸/石田靖/小沢昭一/谷啓/益岡徹/鶴田忍/加藤武/小野武彦/中村梅雀/村野武範/奈良岡朋子/中本賢 (松竹配給/2007年日本映画/114分)

## 第2章

映画は俳優で観る!

……『釣りバカ18』は、美しい釣り場をもつ大野浜に建つ大リゾート施設反対闘争にスーさんとハマちゃんが絡む物語。そして、その業者は何と鈴木建設! ハマちゃんは無責任に好きなことを言っていればいいだけだが、社長から会長に就任したスーさんの手綱捌きは……? 現実にはありえね一解決となるが、まあ『釣りバカ』だからいいか……? もっとも、それで「勝った! 勝った!」と騒いでいる若者たちは、ホントにバカだねえ……。

### 『釣りバカ17』の経営理念の復習を……

『釣りバカ17』(06年)では、役員たちがビルの管理会社を立ちあげ、苦勞せずに収益をあげようとした提案に対してそれを是とせず、「わが社はあくまで建物を建設することによって社会に貢献するのだ」という哲学を披露したスーさんこと鈴木一之助社長(三國連太郎)の経営哲学が明確に示されていた。さらに、大きな利益を生む巨大プロジェクトだけではなく、収益は少なくとも今後社会的に必要とされている「ケアセンター」建設に前向きに取り組むとともに、そんな小さな建物の起工式にも社長が自ら出席すると宣言するシーンにおいて、その経営哲学は明確に示されていた(『シネマルーム11』240頁参照)。

### 『釣りバカ18』にみる経営理念は……?

土地バブルの発生とその崩壊を経験し、小泉改革によってやっと景気回復、デフレ脱出を果たしたと思った途端、2007年8月アメリカでのサブプライムローン問題の発生、そして2007年9月12日突然の安倍晋三総理の辞任表明により、不動産をめぐ

る情勢は再び不明朗に……。もちろんそれは、この『釣りバカ18』を製作している時点ではまだ見えていなかったが……。

そんな不動産をめぐる昨今の情勢の中、この『釣りバカ18』の主な舞台は岡山県にある架空のまち瀬戸浜市。そこにある瀬戸内海を臨む美しい大野浜において大規模なリゾート施設開発を目指していた鈴木建設だったが、そこでスーさんはある重大な経営決断を迫られることに……。昨今、「企業の社会的責任（CSR）」が大きなテーマとされているが、巨大リゾート施設建設と環境保全との両立は難しい問題。したがって、そこで下される決断には、企業の社会的責任や経営哲学が色濃く反映されるはず。さて、そこで下された経営決断とは……？

これは、映画の観客としての私からみれば実にすばらしい決断だが、その経営理念とその決断はあくまで映画上だけの話であり、現実にはとてもムリ……？

## 社長から会長へ、その意味は……？

1945年の敗戦から62年を経た今、政治家はもちろん経営者の世代交代も確実に進んでいる。団塊世代である私のイメージでは、それまで社長として全権限を行使してきた、今58歳の私より10歳前後年上の経営者たちがボチボチ社長から会長職に退いているのが現状。もっとも、その社長から会長への配置転換については、その実質を伴っているケースと名目だけのケースに分かれるのは当然。

弁護士としての私が見聞しているあのケース、このケースでは前者の例が多いが、『釣りバカ18』におけるスーさんの社長から会長への転換は……？ 『釣りバカ』シリーズ20年を契機として（？）スーさんは社長から会長に就任したが、映画を観ていると実は権力構造の実体は不変……？ これでは、スーさんの会長就任と堀田新社長（鶴田忍）の誕生は全然意味がないのだが……。

## 経営者としての80代、90代は……？

他方、創業者として50年あまり鈴木建設と日本経済を支えてきたスーさんは既に80代……？ 私の大好きな竹内まりやの新曲『人生の扉』では、「And they say still good to be 80, But I'll maybe live over 90」と歌われ、「君のデニムの青が 褪せてゆくほど 味わい増すように 長い旅路の果てに 輝く何かが 誰にでもあるさ」と年齢を重ねていくことを楽しみ、そして「But I still believe it's worth living」（私はまだ

信じている。生きていくこと自体に価値があることを)と歌われている。

しかし、これはあくまで一般社会人としての生き方であり、企業のトップの生き方はまた別。すなわち、いくら会長に退いたとはいえ、その就任式のあいさつで、突如頭の中が真っ白になり、自分が何者で今何をしようとしているのか一瞬サッパリわからなくなってしまうという症状が出れば、それは決定的にヤバイこと。やはり責任ある立場にある人間は、年相応に進退を決しなければ……。

## ハマちゃんのサラリーマン人生はいつまで……？

今年3月27日に亡くなった植木等が、昭和元禄の良き時代の気楽なサラリーマン像の象徴なら、鈴木建設の万年ヒラ社員であるハマちゃんこと浜崎伝助（西田敏行）は、土地バブルが崩壊した平成の時代に入ってから気楽なサラリーマンの典型。しかし、植木等は要領よく立ち回れば意外な立身出世ができたりもしたが、ハマちゃんにはとてもそれはムリ。仕事はほどほどにして、最大限釣りを楽しみ、最愛の妻みち子（浅田美代子）と時々合体……？

国内での競争はもとより、国際的な競争力をつけなければ企業自身が生き残れないという厳しい競争状態となっている今、『釣りバカ』シリーズお馴染みの堀田新社長、秋山専務（加藤武）、原口取締役（小野武彦）、草森秘書課長（中村梅雀）ら、気楽なアホバカ重役陣はもちろん、たとえ安月給の万年ヒラ社員であっても、ハマちゃんのような生産性のあがらない(?)社員を飼っておく余裕は企業にはないはず。今までは鈴木社長の「釣りの師匠」という名目で、何かとスーさんの庇護を受けることによってハマちゃんのサラリーマン生活が成り立っていたが、スーさんが会長に就任し、ボチボチと権力移行が進んでいけば、ハマちゃんのサラリーマン人生もそう長くはないのでは……？

## ストーリー構成のポイントは……？

『釣りバカ18』のストーリー構成のポイントは、失踪した(?)スーさんを探してハマちゃんが「釣り出張」に出かけたところ、たまたま瀬戸浜市の大野浜でめぐり会うこと。また、スーさんがお世話になっていた海蔵寺がリゾート施設建設反対運動の若者たちの集場所になっていたため、彼らの闘いのターゲットが鈴木建設であると知ってしまうこと。したがって、ハマちゃんはまだしも、スーさんはきわめて微妙で

難しい立場に立つことになるわけだ。ハマちゃんは、ヒッピー風(?)の怪しげなスタイルに姿を変えて、説明会において釣り場擁護論、お魚擁護論の立場からリゾート施設建設反対論を一席ぶてばいいだけだが、数年越しのこの一大プロジェクトの成否には会社の命運がかかっているわけだから、会長のスーさんが立場に窮したのは当然。さあ、スーさんはそこでいかなる決断を……？

## こんな反対闘争では……？

『釣りバカ18』のストーリーは瀬戸に建設されようとしている巨大リゾート施設に反対する地元住民たちの反対闘争と、それに微妙に絡むスーさん、ハマちゃんの活躍を軸として展開されていく。反対闘争のリーダーが地元の写真館の二代目の高原昌平(高嶋政伸)と昌平の幼なじみの木村(石田靖)。そして、そんな若者たちを受け入れる海蔵寺の妻が木山温子(星由里子)で、昌平の恋人である珠恵(檀れい)はその娘という設定だ。

2003年の『釣りバカ14』以降、5作続けて『釣りバカ』シリーズの監督を続けているのが朝原雄三監督だが、今回の環境保全をテーマとしたリゾート施設建設反対闘争の描き方は、いかにも「55年体制」そのもので、常に新しい時代状況に応じて闘争スタイルを工夫している弁護士の私にしてみれば、大きな違和感が……？説明会での論点のかみ合わない議論や、大声を張りあげての団交スタイルはもう古い……。しかも、裁判に負けて打つ手がなくなったら、今度は現場で座り込み、そんな単純な闘争パターンが時代遅れであることは、今や誰の目にも明らかなのだが……？

## コンプライアンス(法令順守)は……？ アカウンタビリティ(説明責任)は……？

近時、「企業の社会的責任(CSR)」の議論とともに、ステークホルダーの議論もさかんになっている。ステークホルダーとは、株主の他、投資家、従業員、取引先、顧客など企業と利害関係を有するものの総称だが、近時企業の敵対的買収問題が次々と発生する中、「会社は誰のものか」というテーマが生まれ、その延長線の中で議論されているテーマだ。

他方、ここ数年、コンプライアンス(法令順守)という言葉が新聞紙上でも目立ってきたが、これは、カネボウ、ライブドア、村上ファンドなど企業の不祥事が多発し続けている中で、次第に注目を集めてきたテーマ。さらに最近では、企業経営のみなら

ず政治の世界でも、アカウントビリティ（説明責任）という言葉がよく使われるようになったが、これは透明性という価値の増大とセットになった大切な論点だ。

私がなぜ今、こんなことを書いているのか？ それは、スーさんが何やら1人でコソコソと動いて、鈴木建設の大方針を決定したことの当否を皆さんに考えてもらいたいため……。調査の結果、スーさんがたどり着いた結論は、渋谷剛三（小沢昭一）と接触し、局面を打開することだった。彼は、岡山県で財政界に強い影響力をもつ陰の実力者らしい。戦後の混乱期から裸一貫で建設業を立ちあげてきたスーさんに、まだ生き残っている同世代の実力者（化け物？）たちとの人脈があるのは当然……。したがって、イザという時にはそういう陰の実力者と接触し、トップによるツルのひと声で方針決定ということもありうるわけだ。

しかし、もしそんなボス折衝によるヤミ取引、ウラ取引で企業の経営方針が決定されるとしたら……。一体コンプライアンスはどうなるの……。そして、アカウントビリティはどうなるの……。さらに、ステークホルダーたちに対して、スーさんは一体どう説明するの……。私が鈴木建設の株主だとしたら、直ちに株主総会で質問したいところだが……。？

## キネ旬の採点は低いが……

私がいつも楽しみに読んでいる『キネマ旬報』10月上旬号の「REVIEW 2007 Part 1」は『釣りバカ18』を取りあげているが、4人の採点者は1点が2人、2点が2人、合計6点と最悪……。 「スーさん、もういい」という叫びもわからないではないが、多分この4人の評論家は事前に試写室でこれを観ているだけで、映画館での客の入り具合はご存知ないのでは……。？

たしかに、作品としての出来や三國連太郎の年齢そして決まりきったパターンのくり返しという限界面はあるものの、映画館で、おじいちゃん、おばあちゃんが2人で杖をつきながら支え合って座席についている姿を見ると、やはり単純明快な娯楽作品を求める国民のニーズに合わせて、中身が乏しくても楽しいだけで十分という作品を提供し続けることは映画人の義務なのではと思う気持ちに……。？ 小難しい映画をさまざまな哲学的観点から分析する評論も悪くはないが、年に1度夏の暑い盛りだけは、バカになってアハハと笑ってみるのも、「寅さん」亡き今、国民的行事としてはいいのでは……。？

2007(平成19)年9月22日記